

可愛いトマト

神戸大学附属中等教育学校 2年 宮崎 由更加

「バイト疲れたあ」おなかですいた。スーパーに買出しに行かなければ。明日の朝ごはんもおうかな。さっぱりしたものが食べたい。野菜売り場に行く。ニンジン、かおうかな。

スーパー帰り、段ボール箱がおいてある。文字が書いてある。「可愛いトマト」気になって覗く。見た目はふわふわのもふもふ。甘い匂いにする。連れて帰ってもいいよね。

本当にトマトらしい。食べられるみたい。美味しそう。寒いところが苦手なのか。冷蔵庫に入れないで置く。「ニンジンが食べたいナア」「え？ニンジンが食べたいの？」「まあ、いいかな。ニンジンよりこっちのほうが美味しそうだし。ニンジンを小さく切ってトマトに与える。」もぐっ「さつきより赤くなってるような気がする。フルーツみたいな甘い匂いも強くなっている。私も夜ご飯、食べないと。」

朝の6時。目が覚める。お腹が空いた。キッチンに行く。「トマト増える。「昨日買った大きいトマトの他に、ミニトマトが10個程度ある。大きいと同じように、ふわふわもふもふ。小さくて可愛い。軽いからなのか、よく跳ねる。「あ、時間がない！早く学校に行かなくちゃ。」もそもそと逃げる大きいトマトを捕まえる。そのまま食べるには大きすぎるかな、まあいいや。」もぐっ「予想通り、甘くてすごく美味しい。「ニンジンが食べたいナア」「ニンジン……」ミニトマトが鳴いている。まだ緑の部分が残ってる。酸っぱそう。大きく成長したら甘くなるかもしれない。学校の帰りにニンジン、たくさん買いに行かないと。」

夕方の5時。バイトに行く前に家に帰る。ミニトマトにニンジンを与えないといけない。トマトが転がってる。様子を見る。やっぱり、大きくなってる。でも、色はまだまだかな。甘い匂いもしない。朝よりも元気がないように見える。ニンジンを小さく切る。集まってきたミニトマトが必死に食べる。元気になってくれたかな。もつと、もつと大きくなってほしいな。「行つてきます。」

夜の8時。トマトはニンジンを完食したみたい。観察しながら、夕食を食べる。「癒やされる。「さつきよりも絶対、赤くなってる。匂いが甘い。ふわふわもふもふな見た目に、愛らしい動き。跳ねたり転がったりしている。トマトのもしか考えられない。甘い匂いに頭がふわふわする。回らないでトマトを何度もなでる。トマトが小刻みに震える。これ以上ないくらい赤みが増している。濃くて甘い匂いとともにトマトが割れ、口からミニトマトが出てくる。とても小さい。1個のトマトから10個程度、ミニトマトが出てくる。トマトの数は100を超えている。大きいトマトはますます甘い匂いを強く漂わせる。頭がおかしくなりそう。明日も食べたいな、トマト。ニンジン、もつと買わないといけないな。」

朝の6時。目が覚める。お腹がすいた。キッチンに行く。キッチンにはトマトがあふれかえっている。「トマト、どっしってこんなに増えて。「甘い匂いがふわふわと漂う。わからない。考える

のをやめる。トマトを捕まえる。食べる。甘い。美味しい。ああ本当に幸せ。切ったニンジンをつたくさんお皿に盛る。学校でも、お昼ご飯に食べたいな。一番大きいのを連れていく。

授業前。学校に行き、友達と会う。「おはよう。ねえ聞いて、今日のお昼。とつてもかわいいんだよ。」「楽しみだね。」

四時間目も終わった。お昼休みがこんなに楽しみだななんて。トマトを食べに中庭にでる。トマトを取り出す。甘い。数も増えている。100個程度になっているのかな。あの大きな1つからこんなにたくさん。大きいトマトと目を合わせる。大きな口を開けて食べる。美味しい。甘い。家に帰るのが楽しみ。残ったミニトマトのことを忘れて教室に戻る。早く家に帰りたい。早くトマトを食べたい。

中庭に残されたミニトマトたちは、太陽の光を吸収してすくすくと成長する。より大きく、赤くなり、中庭は甘い匂いに満ちる。トマトは元気に飛び跳ねる。校舎内へと入っていく。トマト。トマトの通った後にはミニトマトと甘い香りが残される。それらは学校中に広がる。教室に入り、容姿と匂いで生徒たちの心を奪う。生徒たちはそれらを家に持ち帰る。

生徒たちの持ち帰ったトマトは家も支配する。人々はトマトの美味しさの虜になる。トマトは人々の家でニンジンにより成長する。昼には太陽の光を吸収して成長する。トマトは人々の心を支配し、町全体に広まる。トマトは車、電車、船、飛行機に乗り込み、地域、国、世界へと進出する。その愛らしい見た目と甘い匂いは出会ってしまった人の心を奪う。人々はトマトのためにニンジンを栽培する。トマトはニンジンを食べ、日光を浴びて、繁殖していく。